

中務内侍日記論

—その世界と執筆契機—

藤本勝義

—

十三世紀末頃成立したと考えられる中務内侍日記の研究は、玉井幸助氏の「中務内侍日記新注」(昭33、増訂版昭41)によって、かなりの成果があげられている。しかし、中世日記文学のなかでも特に研究の後れている作品であり、論文も少なく、今後の課題も多い。内容的に把握されていない点も多く、成立事情も解明されているとはいえない。幸い、近年、岩佐美代子氏や小久保崇明氏によって、彰考館本の本文の優位が表され、それに基づく総索引も刊行される予定と聞く。研究の進展の期待がもたれよう。

この日記の記事は、弘安三年(1280)～正応五年(1292)の十三年間の、伏見天皇東宮時代とその御代を描きつつ、作者の感懐等を記しているのだが、この前後には、歴史社会的に看過できない出来事があった。文永十一年(1274)の蒙古襲来、弘安四年(1281)にも弘安の役があり、弘安八年(1285)にはいわゆる霜月騒動が起きている。しかし、これらの事件が中務内侍日記に全く触れられないことなどから、作者の政治・社会への無関心ぶりが指摘されたりした。武家政治の中で、衰微した貴族生活にもたれかかり、ひたすら平安朝への憧憬に占め

られたような作品の様態は、「十六夜日記」、「うたたね」などのもつ中世的で個性的な側面からすると、取るに足らない存在とも思われよう。又、平安朝日記の伝統を継承しつつも、後に、出家し漂泊流離の旅をする「とはずがたり」からみても、中務内侍日記の脆弱さは物足りなさが感じられる。

しかし、出家遁世などしてある意味では主体的に生きる者たちの陰で、形骸化した伝統と権威にすがりつき、きわめて狭い空間で、皇室やその行事に係わることばかりに喜びを感じ、過去を振り返って溜息をつくような生き方も、逆にまた、その時代の一面を反映するものであり、否定される性格のものでもないのである。作者にとっては、自分が仕える熙仁親王（伏見天皇）を中心とした世界の命運こそが、最大の関心事であったのである。持明院・大覺寺兩統の対立は、正元元年（1260）三月、後深草天皇が龜山天皇に讓位した時、皇太子には、後深草の皇子（熙仁親王）ではなく、龜山の皇子・世仁親王（後宇多天皇）が決められたことに発した。この後、文永十一年（1234）正月、龜山が讓位し後宇多が踐祚したが、翌年、後深草院やその近臣・西園寺実兼の幕府への働きかけなどで、皇太子として熙仁親王を立坊させた。しかし、この熙仁の東宮時代は、十数年にも及び、持明院統にとって不満や不安が募るものであった。中務内侍日記のたたえている憂愁は、この不満と嘆きの反映とも考えられる。このことと関連するが、この日記の記事より四、五十年前に成立した「弁内侍日記」は、その明朗さが指摘されているが、それは、作者の性格もさることながら、安定した後醍醐上皇の院政下で幼い後深草天皇に仕える、といった明るさと同係しているのかもしれない。「弁内侍日記」の記事は、華やかな行事が中心で、高貴な者たちに囲まれ得意な日々を送るといった趣がある。後深草天皇の御代の讚美に目は向けられ、私生活に関する記事はほとんどみられない。現存する一七五段^③（虫食いがかなり多い）のうち、意味の通じる一六一段で、「おもしろし」「をかし」「めでたし」等、快的感情を示す語をもつ章段が一〇五であるに對し、不快感情を示す語をもつのは十五段にすぎない、という大内摩耶子氏の指摘があり、この日記の性格が示される。これに對して、中務内侍日記は、「おもしろし」「をか

し」などは少なく、「あはれ」「悲し」「はかなし」という哀調を帯びた言葉が非常に多いことが知られている。

中務内侍日記の内容は、きわめて大雑把に分類すると、(一)公儀の記録、(二)宮廷女房の生活体験やその感懐の表出、(三)里などでの私的生活の記、の三つになる(むろんどこかに分類しにくいものもある)。(一)の行事の記事は、日記の後半の大部分を占め、伏見天皇の即位式の長大な描写に代表される。全体的に、公儀の具体的記録とその時の感懐を歌に詠むというパターンをなす。個人的感想などはほとんど差しさむことがなく、自分の奉仕する伏見天皇の栄えある公儀をやみくもに記している、といった感を受ける。例えば、「紫式部日記」も、敦成親王(後一条天皇)誕生記として、栄華的記録がされており、時代背景等に違いがあるにしても、栄華の記録という基本的姿勢は、中務内侍日記の場合とひどく違うとは思われない。しかし、紫日記では、中宮出産や産養、行幸あるいは五節の舞姫などの行事を記すにも、題材を選択し、必ず、人間観察の鋭さが表れ出していた。もっとも、行事の精細な記録自体は、中務内侍という女官の職掌柄当り前のことであった。これは、男性の手になる漢文体日記に類似する。むしろ、この(一)の部分だけではいわずに日記文学とはいえないであろう。(二)や(三)で作者の内面が形象されることによつて、(一)とのバランスがとれ、女流日記文学としての面目が保たれるともいえよう。

本日記の成立は、普通、最後の記事である正応五年三月以後、病のため里に引き籠り、間もない頃と考えられている。日記の大部分は、内侍があとから思い出して書いたものといわれるが、そうだとすると、かなりのメモ、原日記に相当するものがなければ書けないと思われる。それは、その日の気象状況など、まずほとんどが「勅仲記」等の記録に照らししても、間違いないことなどによる。特に日記の前半の記事がきわめて少ないが、それらは、特に思い出したものだけを記したといったものではなく、幾つもの中から限られたものが選びとられたと考えられる。弘安三年(六年)の記事は、それぞれ年に一日ずつの記事しかないが、それは、逆に一事例ずつ意識的に選びとったと思われるのである。年に一事例ずつというのは、いかにも意図的である。しかも、それらにははっきりした共通

性があつた。これは後述することになる。

又、日記中には日時のあいまいな所や、排列の順が前後した所などがあるが、作者自身が回想記として一つの作品を書きまとめようと意図したものであり、大体においては、まず原本そのままの形を伝えていふと考へてよいと思われる。排列の順の通行は、顕著なものとして、弘安八年の後にはっきりと「弘安七年のとし」として、亡き人の宿を作者が訪れる記事があるが、おそらく作者はそれを承知の上で書き記したものであろう。この弘安七年の記事の前に幾条も人の死を記しており、「死」で統一するため、あえて弘安七年の同類の記事を取り入れたものと考えられる。原本が一度散佚したのが、後人の手によつて再び年月を追つて輯録されたものとはとても考えられないのである。後述するが、「死」というものによせる中務内侍自身の複雑な思いが、その裏にあるためでもある。

後半の行事の記録の積み重ねは、この言葉の量そのものが、待ちに待った伏見天皇の栄華をアピールすることになるが、文体としてみると羅列の感を免れない。しかし、前半の記事は、それぞれに共通項があり作者の心情の捉えられる面が多く、作者の精神の軌跡を追うことが可能である。

本稿では、この日記の構造を視座として作者の思考を捉え、本日記執筆の意図、成立事情を追究しようと思う。

二

本日記の構成は、彰考館本の三十六葉裏が空白となつており、三十七葉表から、

あら玉の年を重ねれば、春のみやまの木がくれより、花・郭公・月・雪につけて心をのぶるなぐさみもさ
すがにありといへども、……
(211頁)⁹⁾

として改まった筆致がみられ、ここで上巻と下巻を分けたと考へられる。作者のはっきりした構成意識が捉えられ

るのである。前半にあたる上巻は東宮時代の七年分で、後半の下巻は主に伏見天皇御代の六年分である。下巻の記事は、正応二年、四年、五年の分がほぼ全くないため、弘安十年、十一年（正応元年）の分が大半を占めることになるが、その大部分は、後宇多天皇讓位に始まる公的行事の記録である。本日記の特徴である憂愁の色調は、上巻に特に顯著であるが、その上巻も、弘安七年の分が多く、先にも触れたように、弘安三〜六年の記事はそれぞれ一事例ずつしかないという偏りを示している。特に印象的なそれらの事例が選びとられ、他は切り捨てられたと思われる。これらは、決して、東宮を囲んでの風流な遊びの模様を情趣的に描いていて、自然描写が必ずなされ、ほとんどが月光をポイントとしているという特徴がある。

次に、まず、作者の思考や意識を捉えるに重要と思われる弘安三年（弘安七年八月十三日）の記事の六事例全てをとりあげ、その構造分析を行ない、これらの共通項を明確にしたい。

(A) 弘安三年十二月十五日の条

ただかかる世のそぞろごとのみ心にしみて忘れがたき中にも、こうあん三年、伏見殿の御儀法とて、院の御かたは御るすなりしに、^①十五夜の月も雪もうち散りて、風もひややかなる枯野の庭の気色物あはれなれど、同じ心に見る人もなし。^②……すさまじきものとかやいひふるすなるしはすの月夜なれど、宮の中はみなしろたへに見えわたりて、木々のこずゑは花かと思ゆ。……音なくしづまりたるに、たえだえ岩にもるる水の音ばかりして、軒端の松のみぞつれなく見ゆる。……軒ちかく一むら生ひたるくれ竹の雪折れしたるも、なべて枯れぬる草よりもはかなく、よろづにけちかきさまにみ所そひてぞ侍る。……すこしはれつる空もまたかきくらし、風もはげしくさえたるに、やもめがらすの一声もあはれをそへてぞおぼゆる。

ながめわび心もそらにかきくれて降る白雪にかすむ月影

うきふしを思ひみだれてはかなきはみぎはの芦の雪の下をれ

……時うつり鳥もしばしばなくに、またあはれをそふる鐘の音も枕に近き心地して、いとあはれにものがないし。
我ならで鳥もなきけりねをそへて明けゆく鐘のさゆるひびきに

(189~190)

長い引用になったが、この条から、中務内侍日記のもつ幾つかの重要な要素を指摘できる。傍線部②は、伏見殿で行われた法華儀法のため御深草院が留守であることを表し、院と同じ御所（冷泉宮小路殿）に住む東宮や伺候する者たちが、寛いだ状況のもとで、十五夜（ただし冬）の情趣に浸ることを語る。このような御所内での情趣的な遊びは、多く、後深草院の留守の折に行われる、きわめて私的な催し事であった。

①や④などは、この時の天象の描写であるが、複雑な空合いであることが、一つの特長となっている。この場合は「十五夜の月」があるが、少し晴れてもすぐ曇り、雪も散らつくといった微妙な天気であって、決して、満月が快晴の空に冴えわたるといふ、ありきたりの記述なのではない。これら選びとられた年月日は、なによりも、やや暗く微妙な天象が、作者を動かしたものと考えられるのである。その空合いも手伝って、その時の遊び事が「あはれ」を誘うことになる。この日記には「あはれ」が多用されているが、ここでも、波線部のように幾度か出てくる。さらに、作者の三首の歌によって、一層、憂愁の心情が象られる。これらの上の句「ながめわび心もそらに……」、
「うきふしを思ひみだれて……」、「我ならで鳥もなきけり……」は、いずれも物思いに堪えず涙を流し世の憂さを感ずる、という憂愁の思いが直接表出されており、いわゆる無常観に繋るものである。冷えさびた自然に喚起されたかたちをとってはいるが、この心情は、むしろ、前提的に作者に備っているもので、それがこのような天象や風物によって、際立たせられていると思われるのである。この思いが何に由来するのかが問題であるが、後に触れることになる。

◎は、古来殺風景なものとして否定されてきた、師走の月のことを記しているが、これは、源氏物語、更級日記

等に記述されているものにより、⁽¹⁰⁾ 師走の月にむしる情趣を感じているところである。次の「源氏物語」朝顔巻の描写の影響が特に強い。

① 雪のいたう降り積りたる上に、今も散りつつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人の御容貌も光まさりて見ゆ。② 「……冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみて、……すさまじき例に言ひおきけむ人の心浅さよ」とて、御簾巻き上げさせたまふ。④ 月は限なくさし出でて、ひとつ色に見え渡されたるに、……。

(朝顔480頁)⁽¹¹⁾

傍線部①、②は、中務内侍日記の⑥の描写に繋り、「小雪散る中で冴ゆる冬の月」なる新鮮な情趣美を築きあげた。又、③、④は③に影響を及ぼしたと考えられ、師走の月にかえてて情趣を見出し、「月と雪との織りなす白一色に輝く幻想美」を描き出した。さらに、二重線部の「松と竹」は、日記では「松」、「くれれ竹」として、冬にふさわしい風物として生かされている。総じて、これらは、源氏物語が発見した斬新な自然美であり、朝顔巻の引用文も名文の誉れ高いところである。後にも触れるが、中務内侍は、源氏物語の自然美にかなり惹かれるところがあったらしく、この朝顔の場合は古来著名な箇所でもあり、自然と彼女の脳裡に刻まれていたものが滲み出たものでもあろう。しかし、この情趣美は、結局は、源氏物語的発想によるわけで、このような描写自体が既に尚古的、王朝的といえる。

このように(A)条から、折、時、天象などの特徴や自然美の特色などがあげられるが、これらは、次の(B)条以下にも共通するものであった。

(B) 弘安四年八月十六日の条

この条も、夕刻から雨が降り、夜更けとともに晴れあがり、そこへ霧がかかるという微妙な空合いの下で、仲秋

の月見が行われる。霧、露、虫の音、月光、さらに雁の声、という具合に、ややでき過ぎともいえる秋の情趣をとり集めたような情景が描かれ、次のような和歌が詠まれている。

霧こめてあはれもふかき秋の夜に雲井雁もなきわたるかな

「霧」と「雁」のとり合せは、「古今集」秋歌「春霞かすみていにし雁がねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへに」などで既に詠まれ、きわめてありきたりの表現となるのだが、「雲井の雁」なる言葉は、源氏物語の夕霧の正妻の呼び名として知られるようになる。少女巻で、夕霧と雲井雁の幼い恋を語るところで、

女君も目を覚まして、風の音の竹に待ちとられてうちそよめくに、雁の鳴きわたる声のほかに聞こゆるに、
幼き心地にも、とかく思し乱るるにや、「雲井雁もわがごとや」と、独りごちたまふけはひ、若うらうたげなり。

(少女42)

として、傍線部のように口ずさんだところから、彼女自身を雲井雁と呼称するわけだが、ここは、「霧深き雲井の雁もわがごとや晴れせず物の悲しかるらむ」と「源氏物語奥入」が示す歌(出典は未詳)を引いている。しかし「雲井雁」は、歌語として熟さないためか、勅撰集ではほとんど詠まれないことがない。まして「雲井雁」と「霧」とを詠み込む歌は、中務内侍日記の時代まで、ほぼ全く見られないのである。だから、この日記の雲井雁も、源氏物語のこの少女巻の描写を念頭に置いているものと考えられる。このように、王朝文学で示される美意識に則つとる面が多い。しかし、それだけでなく、この条でもやはり、

おのづからしばしもきえぬたのみかは軒端の松にかかる白露

という歌のように、露のはかなさに人の世のそれを重ね、無常を感慨しているのである。(A)条の記事同様、(B)条でも、特に深い霧を配した複雑な天象の設定が、憂愁の思いと密接に関連しているといえよう。

(C) 弘安五年四月十七日の条

この記事は、(A)条同様、後深草院の留守の折、ほととぎすの初音を聞くために夜明しをする東宮を中心とした、きわめて私的な遊びを描いている。この日は、現在の陽曆(グレゴリオ曆)に換算すると、「六月三日」にあたり、「雨もをやまず空さへとちて日数つもあるころ」(191)とも記されており、梅雨に入っていると思われる。毎日雨が降り続く中で、所不在の日々の慰めに、ほととぎすの初音を聞くことばかりに腐心しているのである。この(C)条や他の事例も皆夜明ししているが、そこには、風流以上に、精神の抛り所のない、言いようのないむなしさが漂うのである。武家社会での実質的権威をもたぬ皇室の生活ぶりを端的に示すだけでなく、持明院統の長い疎外されたやるせない日々からくる、情性が看取される。

又、ここでも源氏物語が引かれている。

心づくしにまちあかしつる郭公は、それかとおほめくほどの一声に、花橘のかをりなつかしきも、よそふる人も
ありがほの心地して、ひかりなきよのやみのうつつも、思ひなすかたはいづれもあさからねば、なかなかな
る忘れがたみに、今もつきせざりけり。

(191)

「ひかりなきよのやみのうつつ」前後については、桐壺巻の影響が「新注」で指摘されているので略するが、傍線部には花散里巻が投影している。むろん、古今集歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」が基盤にはあるわけだが、花散里巻の「近き橘の薫りなつかしく匂ひ、……」や「橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞとふ」(148)なる光源氏歌などが作者の頭にあってと考えられる。花散里巻は、須磨流謫を前にした光源氏が故桐壺院の思い出に繋る姉妹を訪れ、懐旧の情を抒情的に語るもので、この情趣が、日記の場面の核になっている。ただ、闇夜、雨夜の暗さ、暗鬱さに本日記の独自性がある。作者の心情が投影されているかのような天象なのである。

(D) 弘安六年四月十九日の条

(C) 条のほぼ一年後のことであり、(C) 同様にほととぎすの鳴き声を求めての夜明しが描かれている。

南殿の花橘さかりなる頃なれば、かをなつかしむ郭公もやと待たせおはしますに、……

(192)

とあり、ここでも前掲の花散里巻の部分などが引かれている。この条の主眼は、左中将(藤原為兼)が訳あって籠居して出仕しないのを、東宮が思いやり、歌を届けさせるところにある。つまりは、風流と人の情けを解する東宮の讚美となっている。情趣を媒介とした人間の係わり合いが描かれ、東宮とその側近者たちのみやびな言動をここに刻印する、といった感を受ける。ここでの中心人物・為兼は、時の後宇多天皇(大覚寺統)の庇護を受ける二条家の為世と対立関係にある歌人で、伏見東宮にずっと寵愛され、伏見天皇さらに院政の時代に目の目を見、「玉葉集」唯一の撰者となった。しかし、この(D)条の時点では、いわば干された状態にあり、離伏の時代であった。これは一人為兼に限らず、持明院統に属する人間は皆似たり寄つたりであった。日記では、為兼が何事かあつて出仕せぬ、その事自体の中に存在する人の世の姿、社会的な意味などが、全然かえりみられていないという指摘がある。確かにそのような記述はないわけだが、作者の脳裡に全くないというもおかしなことである。又、無関心のはずもないと思われる。作者は、大覚寺統の御代が続く中、それ故に、不当に長い鬱屈した年月を送る東宮に近侍しているのである。両統対立に無関心でいられるわけもないと考えられる。ただ、そのことが直接作品の上に表れないことはある。東宮とそのグループは、やるせない思いを風流な生活の中に解消していこうとするかのようである。現在、世に迎えられない歌人・京極為兼への東宮の厚情を描いたり、為兼の長歌などを記し、このグループの洒落た交流を記述すること自体が、作者にとって人の世の姿であり、社会的意味をかえりみた結果の、東宮とそのグループのアピールなのかもしれない。又、差しさわりのある事柄には、意識的に目をつぶることもあると思われる。土御門少将から為兼への返歌(長歌)の終りの方に、

これあらはれば「欠句」なかなかいかにうらみまし 心にこむる 忘れがたみを

(195)

として「欠句」がある。現存するこの日記全体を通して、欠語らしい欠語は見あたらないので、この欠句は異常といつてよい。ここは、既に「新注」に説明されているが、虫食いなどの破損とは考えられず、憚る心があつて誰かが故意に削つたもので、反歌がこの長歌にないのも同じ事情と思われる。欠句は「うらみまし」の主語であつたとみられ、この部分には、持明院統や為兼の敵方と思われる者たちから恨まれることを、回避しようとしていることが、抽象的に詠み込まれていると考えられるのである。だから、これらのことから、一概に、作者が政治・社会に無関心だとはいえないように思われる。

(C)条に比べこの(D)は記事の量も多く、人物の言動も、明らかに作者の見てない場面の描写があり、作者の想像が入っているとはいえ、非常に具体的である。しかも、為兼や土御門少将の長歌も、ほぼ完全な姿で記載されており、作者は、実物そのものを手にしていたと思われる。おそらく、親しかつた土御門少将から借り受けたのであろう。この少将は、しばしば日記中に登場し、作者と係わり合う場面もでてくる。少将の死は日記中に記されており、本日記の内容の基調と深く係わるものと考えられ、作者にとって看過できない出来事であつたと思われるが、後述することになる。

(E) 弘安七年三月十七日の条

弘安七年の記事は多いのだが、次の(F)弘安七年八月十三日の条の次に弘安八年の二、三の記事があり、その後には、弘安七年の記事が続くという、前に少し触れた年次の逆行がみられるところである。弘安七年の記事として最初の(E)条も、やはりいままでの記事の基調を踏えている。父の後深草院の留守の折、東宮と側近の私宴が開かれ、天象もまたきわめて複雑である。

ちやうの屋の花の木ずゑおもしろく、秋ならねども身にしむばかり風もはげしき花のあたりは、げにゆきてもうらみまほしきこちして、おぼつかなきほどに、かすめる月は、しくものなくおぼえて、……。定めなくはれくもるむらさめの空もつくりいでたらんやうなり。

(195~196)

傍線部から、強風のため、晴れたり曇ったり急に雨が降ったりで、月もかすむ複雑な空合いであることが知られる。史実に照らしてみると、この日の天候は「勘仲記」に次のようにある。

三月十七日丙寅晴、今日不出仕、……

三月十八日丁卯自夜雨降、朝間大風雷鳴、已剋許屬晴、……

三月十七日は晴とあるが、十八日の記録から、十七日の夜から雨が降り、午前十時頃に晴れるまで雷まで伴う強風が吹く、いわゆる春の嵐であったことがわかる。つまり、日記でも、天候を事実通り記しているといつてよい。だが、このような荒天でも、微妙に変化する空合いの故に、かえって情趣を感じているところに意味がある。「つくりいでたらんやうなり」として、特別に人為的につくったかのように見立てている。この夜のことは、後々まで何度も回想されるので、この時の作者の心情にごまかしがあるとは思えない。この三月十七日は、陽曆で四月十三日にあたり、桜の花盛りの頃で、当然花見の宴が行われるのだらうが、このような荒天での宴は、後深草院不在の寛いだ折だからこそであろう。にしても、そこに情趣を感じるのは、むろん、王朝の美意識とは掛け離れたものといつてよく、作者の複雑な心情と関係していると考えられるのである。この宴のメンバーは、東宮と作者以外に男女三人ずつという少なさで、いずれも作者自身親密な者たちといえる。この夜が後々まで思い起されるのも、印象的な天象もさることながら、この人間関係が重要であろう。この中で、先に触れたが、土御門少将が死に、綾の小路三位は妻(と思われる女性)に死別することが後に記されている。この時のメンバーで他にも死んだ者がいると思われる。これらの死と切り離せぬものとして、この夜の情趣が作者の脳裏に刻みつけられたと考えられるのである。

(F) 弘安七年八月十三日の条

月を見ながら、同僚の女房と長い友情を契り、惟喬親王と業平との交情に思いが及んだりする短い条である。初めに、

ひるより雨ふりてしめやかなるに、^②くれぬれば月はなやかにさし出でて、^⑥をぐらの山もたどるまじげなり。

(196)

とあり、昼から雨が降り、夕方には晴れあがり、月が照っているということで、朝―曇又は晴、昼―雨、夜―晴という、やはり移り変りの激しい天候があげられる。しかし、この日の天気は「勘仲記」によれば「晴」となっている。一日のうち晴れ間が多かったので雨を意に介さなかったのか、というとも思えない。なぜなら、この八月十三日の三日前の記録は、

十日乙卯、陰、時々微雨、未剋後迎晴、

とあり、「曇時々小雨、午後二時過ぎ晴」といった、きわめて克明、具体的に天候が記されている。又、八月十六日も「陰晴不定、時々雨降」という記録があり、「勘仲記」では、このように、天候に対しての細かい観察が常にされているのである。だから、日記の方に問題があると考えられる。「八月十三日」という日付が誤りなのか。この場合はそういうことは考えられない。源氏物語夕霧巻の次の傍線部を、ほぼそのまま引いているからである。

道すがら、あはれなる空をながめて、十三日の月のいとほなやかにさし出でぬれば、小倉の山もたどるまじうおはするに、一条宮は道なりけり。

(夕霧438)

この「十三日の月」は九月のことだが、日記では、八月十三日の月の描写に利用している。九月十三日の月は、いわゆる十三夜として観月の宴が開かれることがあった程なので、仲秋の名月である十五夜の前々日の八月十三夜の月も、当然賞美に値するものである。どちらも「はなやかにさし出で」という形容にふさわしいものといえよう。

「小倉の山」も暗くはあるまいとあるのも、十三夜を引き立てる洒落た比喩であり、日記でもそのまま引いている。そのはなやかな月を、日記では、さらに、傍線部④、⑤の対照で際立たせているのである。④の昼―雨―しめやか、に対し、⑤の夜―晴―はなやか、の対照の妙を作者は主張したかったと思われる。特に月光の美をきわやかに象るために、昼の雨のもの静かな情景を創り出したのではないのか。いままで分析してきた(A) (F)の六条のうち五条までが雨(又は雪)を描いていた。雨に係わる天象に作者は惹かれていたといつてよからう。その結果、この(F)条のように虚構化され「雨」を創り出したと考えられるのである。それは、この(F)全体が、決して明るくない色調であることと関係すると思われる。長い友情を契るにしても、伊勢物語の惟喬親王・業平のさびしい交渉を念頭に置いたり、「てんぼふりんの契り長生殿のここちして」と記すように、「長生殿」として、玄宗・楊貴妃の悲劇に通じる契りを想起しているのである。長恨歌の「七月七日長生殿、夜半無人私語時、……」なる著名な詩句を踏えているのだが、直接には、「新注」に指摘があるように、源氏物語夕顔巻の「長生殿の古き例はゆゆしくて、……」(232)を念頭に置いたものと思われる。玄宗ら二人だけで語った内容は、死後のことであり不吉な内容であった。だから日記での二人の友情の契りも、決して、明るい将来性のあるニュアンスなのではない。根底に無常感があり、先々の不安が、一晩中の語らいの時をもたせたと思えるのである。この女房は、日記執筆時点では既に死去している可能性が強い。この条には死の予言のようなものがある。あるいは、この女房の死に接したことから、それを先取りして、不吉な色調のこの条を再構成したのかもしれない。この条から続けて四条が、全て人の死に係っていることを思うと、この女房の死は大いに考えられるのである。

(F)の次は、先の(D)条の情趣的夜の回想と人の死が語られ(E)①条として後述)、その後の条も死を語っていき、場面がいままでとは違ってくる。

条	所	折	時	天	象	情趣の中心	源氏物語の 影響(巻名)
(A) 弘安三年十二月十五日	御所	後深草院が御幸で留守	夜↓晝	雪、晴、曇、風	師走の月	朝顔	
(B) 弘安四年八月十六日	〃	月見の宴	〃	雨のち晴、霧、風	霧と月	少女	
(C) 弘安五年四月十七日	〃	後深草院が御幸で留守	〃	雨	郭公	桐壺	
(D) 弘安六年四月十九日	〃	後深草院御幸と還御	〃	曇のち晴	郭公	花散里	(註)
(E) 弘安七年三月十七日	〃	後深草院が御幸で留守	〃	雨、晴、曇、強風	覆める月と花		
(F) 弘安七年八月十三日	〃	〃	〃	雨のち晴	雨後の月	夕顔 夕霧	

(註) この日の天気は「勘仲記」によれば「陰」とあり、翌二十日は「晴」とあり、日記にも有明の月があるので「曇のち晴」とした。

これまで述べてきた(A)～(F)は、弘安三年～七年の特に印象的な夜を、ほぼ一事例ずつ作者が選び出したと思われるもので、表で示したように、かなりの共通項をもち、それが本日記の特色を象るものとなっている。(A)～(F)全てが御所内の、夜から翌晝にかけての出来事であった。一晚中遊び事をしたり語り合ったりすることが、このグループのあるいは作者自身の頼りない生への不安などを、逆に示しているとも思われる。

又、大半が、後深草上皇の留守の折などに行なう私的な催し事であり、東宮と僅かな側近者だけの、きわめて私的な遊び事である。親密で寛いだ雰囲気の中で心の交流がなされている。このことが、作者の脳裏から、友の死を、いつまでも決して消し去らない要因となったものと思われるのである。

そしてほとんどに、雨を中心とした薄暗い空合いが記されており、作者自身の憂愁の思いの重なる天象の日が、自然と選びとられたものと考えられる。これは、日記執筆時、すなわち無常の世を十分体験した四十歳前後(「新

注」説)の、死を控えた時期の作者の心情が、かなり投影されていると思われる。決して、王朝的情趣そのものを無条件に継承しているものではない。中世的無常観が被さっているものといえる。

ただし、むろん、月、雪、花、郭公といった王朝的美意識にひかれるものは多い。「源氏物語」の影響の強さにもそれは表れている。もっともこのことは、作者個人の好みというよりは、東宮とそのグループの王朝志向、源氏物語への傾倒を見出すことはできない。東宮が特に親しい者たちには、京極為兼のほかに飛鳥井雅有や先にあげた土御門少将(源具顯)ら和歌や古典文学に造詣が深い人物が多く、一種の文学サロンを形成していた。雅有は著名な源氏学者であり、「源氏のひじり」と称されていた。雅有の日記「嵯峨のかよひ路」には、阿仏尼から毎晩のように源氏の講義を受けていることが記されている。又「春の深山路」からは、東宮との近い関係や源氏研究に大きな関心をもっていたことがわかる。東宮のもとで、弘安三年十一月六日に源氏論義が催されたが、この時の出席者八人のうちに雅有と土御門少将が含まれていた。これが一書にまとめられ「弘安源氏論義」となったのだが、この著者こそ土御門少将であった。この論義で少将は雅有とともに左方として意見をいっているが、源氏の準拠等に詳しいことが具体的に捉えられるし、跋文からも少将が源氏はじめ古典文学に精通していることがわかる。作者は、この少将ときわめて近い関係にあると思われる。又、源氏に強い関心をもつ東宮に近侍しているわけで、自然と源氏との係わりもより強くなったと思われるものである。

三

次に(田)条を何度も回想することの意味について考えてみたい。

(田)① 弘安八年三月十七日の条

この条は、(B)弘安七年三月十七日の条の丁度一年後、その日のことを回想するもので、綾小路三位が思う人を失い、山里に籠居したことにポイントがある。

まことや、こぞのこよひ、月と花とに夜をあかし侍りしも恋しく、ただ今のやうなるに、ほどなくもめぐりあひぬる、定めなき世にながらへにけるかなと思ひつづくるを、…… (197)

この作者の感慨は、特に傍線部の無常観を下敷にした言い方が、僅か一年の時の経過にしては大げさに聞える。しかし、逆にいえば、それだけ作者は病弱であつたことが知られるし、この条などで扱われている人の死が、一層、作者に無常の思いを強くさせていると考えられるのである。

(B)の条は、日記中で(B)①、(B)②、(B)③という具合に何度も回想されていく。それも、(B)が、きわめて複雑な天候をバックにした、思い出深い一夜であつたためではあるうが、親しかつた人の死を契機とした無常観が深く関係していたと思われる。この(B)①条では、土御門少将が中務内侍に多くの歌を渡している。それは一年前のこの日、東宮の前で皆で詠んだ歌の中のことを、多々取り入れて新しく詠んだものである。彼女のものを取り入れたものもあり、それらに彼女は一つ一つ返歌をしている。ここから、昨年の感慨深い思い出が二人に共有されていることがわかる。この日自体の情趣はなにも語られず、全て思い出に明け暮れるというのが、この条の特徴でもあり、一年前の(B)条が基盤となつていることが知られる。

(B)①条の次の「三月三十日」の条にも、彼女は、死んだ思い人のために悲しみに沈む綾小路三位に、慰めの歌を贈つたりしている。

その次の条は、弘安八年の晩秋のことと思われるが、

少将、ててにて侍りし人におくれてこもり侍るに、おくれさきだつもこれにかぎる世のためしとのみなげくに、…… (199)

と記され、少将内侍が父親に先立たれ籠居している山里に、やはり見舞の歌を詠むという話になっている。

さらにその次の条が、先にも記した年時溯行の例で、「弘安七年のとし」と明記されており、作者自身が都を離れた遠い所に住んだ折のことだが、長年親しくしていた人（あるいは彼女の夫かもしれない）の死後数年を経て、その人が籠居していた宿を訪れての感慨を表している。年時を超えて、「死」に関する記事をここに意識的に連ねたものと考えられるのである。

このように、人の死を中心に据えた条が続き、(E)①条からの連想のように思われるが、その前の(F)条にも死の予感があり、結局は、これらの基点は(E)条にあったといえよう。

(E)② 弘安九年三月十七日の条

かくてほどなく年もかへりぬれば、また三月十七日もめぐりあひぬ。定めなき世にながらへにけるも嬉しながら、しめの外なるふせやにうづもれすごしぬるも、同じうき世にめぐれどもなほかひなき身なりけりと、くちをしくおぼゆるに、……

(208)

波線部に明記されるように、(E)の夜がまた回顧される。ここでは、無常の世に生き長らえたことを喜びながらも、出仕せずと里居していることの不満を表し、御所での宮仕えに愛着をもつ作者の姿を示している。この直前の条によれば、この頃作者は病気がちで里居していて、御所での仲間と疎遠になっていて、一層心細く、死の訪れを考へることもあるような精神状態にあった。だから、御所での生活にもどれる日を待ち望む心は、孤独と死とに背を向けようとする心でもあることが知られるのである。孤独と死を忘れられるものがあるとすれば、無常の世にあって、同じような境遇のもと、傷を管め合って生きているともいえる、宮仕え仲間とのみやびな生活しか考えられないといつてよい。

(E)③ 弘安十一年三月十六・十七日の条

この条の前条が伏見天皇即位式の模様の記事であり、式次第が克明に綴られている。この前年十二月九日に内侍に任ぜられた作者は、即位の式場で匂当内侍の剣に対して、璽の捧持の大任を果した。直接栄えある式典に係わった彼女は、帝付き女官の目で、儀式の模様を漏らさず具さに記録する。「身の毛もたち涙がましくめでたくうれし」(226) という喜びを隠しきれない感情表現や歌もあるが、ほとんど客観的な記録であり、帝の栄華の記録を残そうという高級女官の職掌意識が感じられる。帝と命運を共にする高級女官の特性は「讃岐典侍日記」での作者と同類であろう。日記中最も長大なこの即位式の記事は、そのような意味で、作者が最も意を払ったものであつたろう。

この三月十五日の次に、翌日から翌々日の記事である(2)③条があることは重要である。

清涼殿で月に誘われ花見をする所、作者の同僚で親友でもある大納言殿が次のように言う。

池の花のおもかげ、月にさだかにおぼえて恋し。ここのへになる花の色、あかで昔や恋しかるらんとおぼゆれど、それにつけても、ふりにし昔は思ひ出でらるるを、忘れじといひしその世の友はなきもあるにこそ。ひきかへたる雲の上、草のかげにや思ひやるらん。かかるなさけのついでには、忘れぬおほく、しのばれんとやいひおきつらん。

(227~228)

今、皇居となつたこの御所の桜の花を見て、長い東宮時代が思われ、共に花を愛でた友で既に死んだ者のいることを悲しんでいる。即位直後でありながら、その華やかさと裏腹の無常の思いが出されている。苦楽を共にし続けた友が、この栄えある伏見天皇即位を迎えられなかったことは、残された者たちにも、無念の思いを抱かせたであろう。それも、この即位から丁度四年前に、終夜、東宮を中心に月を愛で、花を慈しみ、音楽を楽しんだあの情趣的な一時を共有したのである。翌朝、つまりあの夜からびつたり四年目、大納言殿は、

年をへてけふをかならずちぎりこしひとしもなどかとまらざるらん
と歌を詠みかけ、中務内侍は、

春をへてかはらぬ花の色なればさこそみし世の友とこふらぬ

いつともあはれはたえでありながら忘るなといひしけふぞ悲しき

と返歌する。贈答歌ともに、弘安七年三月十七日(回)の夜の遊びの折存在した友を思う。その夜のことをいつになつても思い起し、忍ぼうと約束をしたその友が、近侍した東宮の即位の今いない、という悲しみと運命のいたずらを反芻している。この喪失感と無常観は、即位式の晴れやかな充足感との相対化で、一層際立つのである。即位式とはほ全く同じ日が思い出の日で、四年の歳月が生と死とを分けていくわけで、この因縁の不可思議さはきわめて劇的なものといえる。これは、その因縁深さから逆に、その夜の思い出が増幅されたものと考えられるのである。

中務内侍日記の最初の形は、後宇多天皇讓位、伏見天皇即位の記事からという考えもある程、作者にとつて、この即位の記事は重要であつたはずである。しかし、その華やかさとは裏腹の憂愁の思いは、この日記の全体に流れる色調でもあつた。弘安十一年三月十五日の即位と(回)③条とは、栄えある儀式と無常の思いが背中合せになつて存在することを、明らかに示しているのである。

弘安七年の思い出の夜(回)条)に伺候していたのは、作者、大納言殿を除くと、女で対の御方と冷泉殿(いずれも素姓等未詳)の二人、男で綾小路三位、伯少将、土御門少将の三人だけである。この中で、綾小路三位は、即位の年の九月十二日従二位となり、十月二十七日には参議となつてゐるし、伯少将も、この年七月七日の管弦の遊びに笛を吹いていることが、本日記に見えてゐるので、二人とも生存しているのは確かである。女房の二人については、その後の消息は全くわからない。しかし、即位式に多くの女官名があげられてゐるにもかかわらず、この二人と思われる人物が示されていないことから、死去した可能性がある。前に少し触れたが、(回)条で雨後の月を作者と二人で愛で、夜明しをした女房が、この二人のうちの一人と思われる。その時長い友情を契つたのだが、「長生殿

の「こちち」など、死を想起するような不吉な比喩が使われていた。源氏物語夕顔巻では、その長恨歌の詩句が、明らかに夕顔の死への道程で引かれていた。

土御門少将についても先に述べたが、即位の前年に死去していた。弘安十年九月十三日の条に彼が重病であることが記されている。この時作者は、「いかにしてしばしこの世に影とめんわかれんことの悲しくもあるかな」(211)など、死別の悲しさをストリートに歌にして彼に贈っている。さらに十一月九日で彼の死が告げられた。

十一月九日、播磨の中将ともあきなくなりぬ。雲の上に心をかけて今ひとたびと願ども立てなにかしけれども、限りある世のならひなりければかなはず。妄念のみあはれにかはゆきことも、「いまはのきは思ひさだめて」といひしに悲し。

(216)

として、「限りある世のならひ」という無常観を前提としたあきらめが表されている。記事の少なさと、最後をむしる簡略に「悲し」と結ぶ文体とから、親密な関係であった貴人を失った作者の悲傷が、かえって際立つのである。しかも、彼の重病の記事は、下巻の冒頭近くにあり、讓位や即位、その他多くの公儀を華やかに記していく下巻の内容の対極にあるような不吉さは、奇妙な位置付けともいえよう。さらに、彼の死の記事は、讓位のすぐ後に位置しており、先の即位直後の、彼らの死を回顧する条(216)③の存在とパターンをなしているのである。これは、偶然とはいえない。伏見即位という持明院統の長年の夢実現のためには、後宇多讓位は大層めでたいことである。その前後に土御門少将(この時は播磨の中将)の重病と死が語られ、即位直後に、四年前の思い出とともに彼らの死が喚起されるという構造の仕組みは、作者の中で、この質の全く違う二つが当初から背中合せになったものとして、決して切り離せない性格のものであったことが知られるのである。

おそらく、もともとは、(A)~(D)条それぞれが等しく、思い出深い夜であったのだろう。記事を比べながら読み進めていく限り、この中の(D)だけが特別に印象が強烈であったとも思われない。本当に忘れられない思い出となった

のは、その夜のメンバーの土御門少将などが死去したことによると思われるが、実は、この少将は、(E)のほかにも(C)や(D)にも出てきており、(D)では為兼への東宮の使いとして立ち、長歌を詠む重要な存在となっていたのである。だから、(C)や(D)などが、後々まで思い起されてもよいはずである。しかし、それらが思い返されることはない。

従って、先ずなによりも、(E)の情趣的な夜が、即位の日とはほ全く同じ三月十七日であったことが重要である。その夜の情趣を共有したのは、東宮の即位を最も待ち望んだ者同士であった。それから丁度四年後に生きて即位式を迎えた者にとって、この晴れの式を見届けることなく死んでいった友の無念さは、自分のことのように感じられたはずである。このあやにくな運命のいたずらこそ、逆に、三月十七日の情趣的な夜を照射し、この日記の柱の一つとして幾度も繰り返し記述させたものと思われるのである。

そして、死んだ友の一人が、作者が心を通わした男性——土御門少将であったことで、一層、宿命的な思いが強まったものと思われる。作者と少将との親密さは、(E)①条で、多量の歌を詠み作者に届け、一年前の思い出(⑫)を共有するところに表れていた。それ以外にも、東宮側近者として常に二人は係わりをもっていたことが知られる。さらに、(D)では、京極為兼の少将への長歌や、少将の返しの長歌の全てが記載されていたが、これは、どちらかの人物から作者が直に見せてもらったことを意味するわけで、(E)①での多量の歌のやりとりから考えても、まず、作者が少将を介していることは間違いないと思われるのである。

少将に対して、伏見天皇自身も「伏見天皇宸記」⁽¹⁾弘安十一年(正応元年)二月十五日の条にて、

雨降、入夜聊有歌詠事、依窓慕淫撃之昔也、殆抑感涙、抑左中将具顯者多年交遊之友也、如此之時莫不接其座、而去年冬受病赴黄泉了、每述志恋慕之心不休、可惜可哀、

として、この日の記事の全てを、その死を惜しむことに費している。「多年交遊之友」である少将は、遊び事の折は常に東宮の側にある風流人であった。この記事は、即位式の丁度一カ月前のことであり、東宮は中務内侍たちと

も、何度か少将の思い出を語ったことが予想される。一方、少将自身は、先にあげた「弘安源氏論義」に自己を評して、

その様卑し。いはば薪を負へる山人の朽木の陰に休めるがごとし。²⁰⁾

と記していた。これは、多分に、身分の低さからくる自己卑下であろうが、この評言に限らず著書の随所から、その学識とともに、謙虚で真摯かつ誠実な人柄が感じられる。だから、東宮はじめ作者たちからも、かなり好意をもたれていたことが想像される。

このように、土御門少将は、平安朝的な皇室の権威や伝統、さらにみやびを志向する東宮とそのグループにとつて、なくてはならぬ風流士であったと思われる。又、それ故にこそ作者ときわめて親密になり、風雅な遊びや歌のやりとりを通し、共有する思い出深い時をもったものといえる。この少将の死は、病弱でもあった作者にとって、いろいろな意味で、無常の思いを非常に強めたものと考えられるのである。

四

中務内侍日記には、冒頭に総序といえる次の文章がある。

いたづらにあかしくらす春秋は、ただ羊のあゆみなる心地して、すゑの露、もとのしづくに、おくれさきだつためしのはかなき世を、かつ思ひながらも、得脱の縁には進まず、みな生々世々にまよひぬべき人間の八くならざるぞあさましき。

本日記の成立事情を考えるに看過できないものである。「羊のあゆみなる心地」として、死に近づきつつある自己を認識し、「すゑの露、もとのしづくに……」と無常の世を噛み締め、出家を考えてはみるが、踏ん切りがつかぬ

いでいる。現世執着があるのだろうか、作者にはもう、過去を振り返り、思い出の中に生きるしかなかったはずである。そして、その忘れがたい思い出を十年以上も前の出来事から拾いあげていく。だが、(A)、(B)、(C)、……と記されていく文章を読んでいく限り、この思い出は決して喜びに溢れたものではなかった。情趣的な情景を次々と描いていくのだが、なぜか、雨が降ったり風が強かったりの、暗い天候の日ばかりが選ばれ、王朝の美意識に則っているようでいて、無常観が流れている複雑なものであった。しかも、人の死にかかずらう内容も目立ち、華やかな即位式の直後にも、この日を待たずして死去した友に思いが及ぶように、全体の色調は哀感の漂うものであった。

おそらく、病氣のため宮仕えを辞めて里に引き籠り、死をはっきり意識した作者の心情が、十数年の過去からピクアップし肉付けしていく記事の性格に投影し、内容を規制していったものと想像される。病弱であった作者は、老齡に達し、孤独と近づく死との心細さから逃れるためにも、本日記をしたためることに埋没したのであろう。その時、楽しかった宮仕えを思い、東宮を思い、なによりも、自分自身も新内侍として直接奉仕した即位式を思い出したと思われる。と同時に、東宮に長い期間近侍して、共に風雅の時をもった親しい友を思い出したのであろう。自己の死を見つめている作者は、友の死が頭をよぎり、どうしてもそのことに触れずにはいられたものと考えられる。皇室の権威が形骸化し、あまつさえ大覚寺統の御代が続く中、東宮の即位は、作者や友人たち側近グループに待ち望まれたものであった。その東宮を囲む思い出深い一夜を共有した友は、奇しくも、四年後のほぼ同じ日に迎えた即位式に、喜びを共有することができなかったのである。この運命のいたずらに翻弄され、無常の思いを強めた作者は、そのことと晴れやかな即位とを背中合せとして、日記の核に据え、過去のメモ等資料の中から、東宮グループの交友関係を特に綴っていったものと思われる。

だから、この日記は、土御門少将を中心とする故人の追慕を契機として執筆された重要な一面をもっているといえる。しかし、これは、決してこの日記のみの特徴なのではなかった。「讃岐典侍日記」は、平安末期の作品ではあ

るが、堀河天皇への追慕の情を全体にたたえていたし、「たまきはる」は、建春門院などへの追慕が執筆動機の一つになつていたとも思われるし、又、「建礼門院右京大夫集」の資盛追慕はあまりにも有名である。

むろん、中務内侍日記は、「たまきはる」などと同様に故人追慕の情だけに色どられた作品ではなかつた。この日記の特色は、東宮が即位して意になつた日々を送ることを、作者は我がことのように喜びつつも、それと背中合せに、この喜びを共有できなかった故人への思いを、どうしても捨て切れなかつたところにある。作者は誠実な人柄であり、愛情豊かな人と思われるが、この思いやりの心と自分に忍び寄る死の影とが、作者にとって掛け替えない生を共有したといえる故人に向寄せたものと考えられるのである。

[注]

- (1) 池田亀鑑「中務内侍日記」(『宮延女流日記文学』昭2)、佐佐木治綱「中務内侍日記——宮延女性の黄昏——」(『解釈と鑑賞』昭29・1)、川瀬一馬「中務内侍日記」の鎌倉鈔本(断簡)について」(『青山学院女子短大紀要』八輯 昭32・11)、久松潜一「中務内侍日記と京極為兼」(『文芸と思想』十八号昭34・11)、大内摩耶子「中務内侍日記考」(『大阪府立大紀要』十一巻昭38・3)、福田秀一「中務内侍日記論」(『中世文学論考』昭50)、岩佐美代子「中世の女流日記文学」(『中世文学』昭52・10)、同「中務内侍日記」統解考」(『国語国文』昭56・11)、同「彰考館本中務内侍日記について」(『中世文学』昭56・12)、津本信博「弁内侍日記と中務内侍日記」(『解釈と鑑賞』昭56・1)、松本寧至「中務内侍日記論」(『中世女流日記文学の研究』昭58)など数は限られている。
- (2) 岩佐美代子「彰考館蔵中務内侍日記」(昭57)、小久保崇明「水府明徳会中務内侍日記——本文篇——」(昭57)
- (3) 玉井幸助「中務内侍日記新注」の分け方による。
- (4) 大内摩耶子(1)の論考
- (5) 福田秀一(1)の論考
- (6) 池田亀鑑(1)の論考
- (7) 玉井幸助「新注」による。

- (8) と同じ。
- (9) 中務内侍日記の本文引用は小久保崇明(2)の著書による。
- (10) (7)と同じ。
- (11) 源氏物語の本文引用は小学館古典全集本による。
- (12) 内田正男『日本曆日原典』(昭50)をもとにした。
- (13) (4)と同じ。
- (14) 増補史料大成「勘仲記」による。
- (15) (12)と同じ。
- (16) 「弘安源氏論義」に記事がある。
- (17) 増補史料大成「伏見天皇宸記」弘安十年十二月十日の条に記事がある。
- (18) 松本寧至(1)の論考
- (19) (17)と同じ。
- (20) 「源氏物語大成」巻七研究資料篇「弘安源氏論義」の本文による。
- (21) (4)と同じ。